# 恐怖の「ウンコーゲキ」

二階堂　元　重

美しい日本語がここ1、2年急速に破壊されていく。

ことばが徐々に簡略化されていくのは世の習いとはいえ、それでも外国語にはない微妙な尊敬語・謙譲語・男ことば・女ことばはしっかりと受け継がれてきたわけで、これは私にとって数少ない日本人としての誇りのひとつだったはずだ。

それがホントにここへきてガラガラと音を立てて崩れていく。私にとってはオゾン層の破壊、地球温暖化と同じくらいの問題だ。

いま最も心を痛めるのはあのいまわしい恐怖の「ウンコーゲキ」である。相手が目上、目下関係なく初対面だろうがなんだろうが猫も杓子も返事は「ウン」、相づちも「ウン」か「ウーン」のあの「ウンコーゲキ」。テレビ番組を媒体に爆発的に蔓延した。テレビの申し子である私が推察するに火付け役は芸能人、おそらく宇多田ヒカルか梅宮アンナだ。それがこともあろうにアナウンサー達に飛び火、強烈なのは「フジ」の女子アナだが最近は天下のＮＨＫまで公然と使ってる。

当然視聴者の皆さんにも幅広く感染、一番たちの悪いのはちっちゃな子どものいる母親で、あの「ウンじゃないでしょ、ハイでしょ。」と諭してたおかあさん達で、「オメエがハイだろ。」と思う。必然的に立ち振る舞いもぞんざいで無礼だし、無教養で薄っぺらい感じがしてしまう。結構意外な人まで使ってるのでびっくりする。

この背景には今や全国区になってしまった「半疑問形」の存在が関わっていると勝手に分析している。以前雑誌「通販生活」で啓発されＴＶコマーシャルにもなったあの「次の角を右？、そのあとまっすぐ？」というやつだ。確固たる自信があるのに「です・ます」の助動詞を省いて疑問形とし、曖昧さを漂わせつつ相づちを強要する暴力的話法で、うっかり返事をしてしまうと相手の思うつぼって感じで敗北感すら感じる。

クイズ番組で「日本一高い山は。」で「富士山？」って答えたら「質問されてもわかりません。」って言ってくんないかなあといつも思ってる。

もともと「です」だって「で候」や「でございます」が短縮変化したわけで、いまの時代なんの違和感なく使ってるが、その変わり目あたりは私のようなクレーマーが騒いでたかもしれない。だからといってなくしちゃうことはないだろう。これじゃ幼稚園児とおんなじだ。

そう、ここでおとなは幼児との違いを「疑問形」で表現し、更に相づちのない場合を想定して「ウン」をつけるのだ。すなわち自問自答してるのである。絶対おかしいでしょ。この自問自答の「ウン」がまずありきで、ついでに返事の「ハイ」まで強引に「ウン」に変わってしまった、これが私の説だ。

「半疑問形の化身」青木功プロはゴルフ界では偉大な業績を残したひとかどの人物だ。長身で手足も長いし色黒で眼光も鋭く勝負師の条件を全て兼ね備えていて、喋らなければつくづくすごい人だと思う。この人が「クラブの？フェースが？トップでかぶっちゃってる？、ウン。」と放送中ズーッとこの調子なもんだから、ゴルフの聖地はいきなり安っぽくなっちゃうし、試合の緊張感もまるで伝わってこない。品がないしガラが悪い。仕方なく消音にして見たが野球やサッカーと違い流れがつかめず弱った。そういえばプロ野球やＪリーグの選手はインタビューなんかで「まだあと１日あるんで。」とか「結果はあとからついてくるんで。」などを好んで使い、そのまま語尾を省略し一拍おいてやっぱり最後は「ウン」でしめる。同じスポーツ選手でも室伏選手は普通に喋る。個人競技である上にハンマーづけでＴＶなんか見る暇ないからかもしれない。

やはりここ１、２年のことばで「じゃないですか。」も大変耳ざわりだ。一見敬語風だが実はこれも脈絡なしに相手に無理やり同意を求める強引な話法で、必ず「なになにって。」で始まる。これに曖昧さが入って「私ってコーヒーとか好きなひとじゃないですか。」みたいに使う。あまりにもチグハグ過ぎたのか今は下火で、代わって「すごいじゃありませんか。」「いいじゃありませんか。」を「すごいじゃないですか。」「いいじゃないですか。」というふうにやはり場違いな使い方で残している。一度ＮＨＫの変人松平アナがオンエア中当時のクボジュンに向って「なになにじゃないですか。」はやめなさい、とかましてアッパレー!!と拍手したことがあったけどそれっきりだった。同様に「なんですよー。」という媚びていながら妙に押し付けがましい言い方もあって、お店の女の子なんかが「Ｌサイズはこれ一点だけなんですよー。」みたいに使う。

次第にエスカレートしてしまって申し訳ないが、とにかくお店の人たちは独特の言い回しをする。マニュアルでもあるかのように「お釣りのほう」、「デザートのほう」、その方角になにがあるの？って感じで僕らは「ほうほう族」と呼んでいるが、信州弁の「ダレ、オメ、ほう」とは関係ないだろう。「デザートのほう」とくれば「杏仁豆腐になります。」と使う。何が杏仁豆腐に成るんだろう？

看護婦の申し送りもそうだ。どこの病院でも大体同じように独特のフシをつけて「小林さんですけども朝から自尿のほうみられてます。」とやる。一度「お願いだから普通に喋ってくんない？」ってたのんだら「婦長さんにおこられる。」と言ってた。ところで看護婦こそ「ウンコーゲキ」のＡ級戦犯だが、これも婦長さんが指導するんだろうか。

デパートの売り場の一角で怪しげな商品をデモってるオヤジの口上やバスガイドの鼻にかかった「右手に見える一番高い指が中指でございやす。」という言い回しも含め全てが仕事を円滑に進めていく上でのやむを得ない手段とこの際百歩譲ってあげるとしても、タメグチだけは勘弁してほしい。「患者様」って呼ぶことにした病院がある。先日近くの歯医者さんに行ったら、衛生士に「二階堂様どうぞ。」と言われびっくり。その彼女に「ここ当たる？フーン。」と言われもっとびっくりした。

いまは「過渡期」なのだ。とにかく滅茶苦

茶だ。ウンウン言ってる芸能人が記者団の質問に「楽しくお付き合いさせていただいてます。」とか言っちゃってるのはいい例だ。「キミは皇族と付き合っとんのんかっちゅうねん。」だ。いづれきれいさっぱり敬語が消え失せる時代が来るに違いない。年とって敬われたいとは思わないが、あからさまにタメグチはたかれるのは悲しいかもしれない。かといって異常も9割を超えれば正常になるわけで、まだあんなこと言ってる馬鹿がいるとのけ者にされるのもくやしい気がする。

といいつつ今日もNHKのスポーツニュースでは、いつも寸足らずな服着てる場違い風な女子アナが元近鉄のコワモテ鈴木投手の解説にいちいち「ウン。なるほどね。」と相づちを打ってる。ヒヤヒヤしてるのは僕だけで案外鈴木氏はなんとも思ってないのかもしれない。